Good Practice! 05

株式会社タケヒロ

発想の転換から生まれたリサイクルシステムの強み

「捨てればゴミ、分ければ資源」
SDGsを通じたコミュニケーションを図ることの意義

株式会社タケヒロは、自動車用防音部品の製造工程で発生する端材を、自社内で再原料化するシステムの事業化に成功し、廃棄物の大幅な削減を実現している。

事業化する前は、製造工程で発生した端材の約4割しかリサイクルできず、残りの約6割を有価物として産業廃棄物業者に引取を依頼していたが、自社内で再原料化すればコスト削減のみならず、環境負荷低減にもつながると考えたことが、システムを導入する契機となった。

事業化後は、自社で端材を原料化し、製造工程への投入や自動車メーカーへ販売するための梱包までを全自動で行い、余剰分のみを材料メーカーに販売している。これにより、端材の効率的な再利用が可能となっただけでなく、廃棄物の量が減少したことによる運送時のCO_2排出量削減などの環境負荷低減効果も期待されている。実際、このリサイクルシステムにより、端材リサイクル率は、約4割から約8割にまで増加した。また、材料の配合に試行錯誤を重ね、製品に使用可能な規格を満たす再生原料を安定して製造し続けている。量や採算性、品質など多角的な視点から製品の持続可能性を追求することが、リサイクルの新たな可能性を広げているのである。

廃棄物を処理するための「費用」を、端材を再利用するための「資金」にできないか。そのような「発想の転換」から生まれたリサイクルシステム。画期的なアイデアを生み出すためには話し合いの場が必要不可欠である。SDGsは企業や個人が果たすべき役割を示すだけでなく、その解決策を議論する機会をも提供することで、企業に一体感をもたらす。そして、この一体感こそが、株式会社タケヒロのリサイクルシステムの強みである。最終的には、廃棄物をゼロに。従来の考え方を捨てて、知恵を絞ることでリサイクルシステムの更なる発展を目指している。

企業担当者の想い

「捨てればゴミ、分ければ資源」考え方次第で、誰でも地球に優しい選択ができます。ペットボトルひとつをとっても、正しく分別することがリサイクルの促進に繋がっています。また、ゴミの行方や資源の効率的な再利用方法を自ら調べ、話し合うことで我々が果たすべき責任が見えてくるはずです。私たちは最終的にゴミをゼロにすることを目標にしています。新たな発想を生み出すためには、何事にも疑問を持って考え抜き、アイデアを出し合う環境が大切だと思います。

株式会社タケヒロ　安城市和泉町北大木4-14［http://www.takehiro.co.jp/jp］